

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0972100507		
法人名	医療法人 杏仁会		
事業所名	グループホーム仁良川苑		
所在地	栃木県下野市仁良川1442		
自己評価作成日	平成22年9月28日	評価結果市町村受理日	平成22年12月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.t-kjcenter.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	平成22年11月9日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

毎日を入居者様一人ひとりのペースで過ごし、寄り添い、お互い信頼関係を築いて、安心して生活できる関係、環境づくりを行っている。又、家族の方も協力して下さり、意見、苦情等が、気軽に言い合え、共にホームを支えてくださっている。全スタッフが入居者様に対し、尊敬と、感謝の気持ちを忘れることなく、入居者様と共に、笑い、悲しみ、喜怒哀楽を共にし、心のふれあいを大切にしている。入居者様、家族さん、スタッフとの関係、そして、ホーム内の空間共に、暖かい雰囲気のあるホームです。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは市東部の田畑や住宅地に囲まれた静かな環境に位置し、古い門構えがある落ち着いた雰囲気が漂う建物であり、敷地内には同法人のデイサービスも併設されている。職員は入居者が日常生活で何を希望しているかを日頃の会話等から把握することに努めており、特に希望の多い外出支援に力を入れている。地域との交流にも積極的に取り組んでおり、今年度から自治会長に運営推進会議に出席してもらい、地域情報の提供や地域住民等との橋渡し役になってもらっている。また、近隣住民のホームへの来所や入居者が住民宅へお茶飲みに出かける等、地域との交流が濃密になってきている。理念に基づき、「ありがとう」という感謝の気持ちを忘れずに、地域社会との繋がりを持って、「笑みの多い暮らし」を目指しているホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	全スタッフが、入居者の気持ちになり、意見を出し合い、自分らしく地域の中で暮らしていける理念を作成し、スタッフ会で基本理念を再確認し、ホーム玄関の目に付く場所に理念を掲げて、日常的に意識できるようにし、実践と関連づけて支援するよう心掛けている。	職員全員で作成した、『もうひとつの家族』を目指し「ありがとう」の気持ちを忘れずに、地域社会と繋がっている「笑みの多い暮らし」を目指す』を理念に掲げ、スタッフ会議等で実践の確認を図りながら日々のケアに取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に入り、地域のふれあいサロンやイベント等に参加させていただいている。去年に比べ地域の方の訪問が増えている。又、ホームでも地域交流のイベントを設け、地域住民のお宅へ直接挨拶に行ったりチラシを配りに行くなど交流に努めている。	職員が近隣住民宅への訪問や挨拶を率先して行う等、積極的に地域にとけ込むよう努めており、地域行事への参加や近隣住民から柿取りやバーベキューに誘われる等、地域の一員として認められている。また、年1回開催しているホーム主催のバザーには多数の地域住民が訪れる等、相互交流にも取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症の人の接し方などを下野市の家族介護者に見学説明を行ったり、民生委員等への勉強会などで認知症の説明等、勉強のためのボランティアの受け入れ等を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域運営推進会議は2ヶ月に1度、自治会長、高齢対策課長、地域包括支援センター等の方々を行い、近況報告、実態報告等を行い、様々な意見を頂きサービスの向上に努めている。	今年度から会議には自治会長や家族会の代表者にも出席してもらっている。会議では入居者の近況や行事等の報告を行っている他、消防訓練等の話題も随時提供しながら、意見交換や助言を貰い、運営に役立っている。	会議の参加者については、地域との繋がりが強い民生委員の参加や議題によっては消防署や消防団、警察署へ職員の派遣を要請する等の検討を期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域運営推進会議の案内なども直接届け、担当者の方いつでも話ができるようにしている。変化があった時などは訪問や電話での助言をもとめている。	運営推進会議には毎回、市担当職員の参加があり、ホームの状況を把握してもらっている他、制度に関する相談等も随時行っている。また、市が実施している傾聴ボランティアや見学会の受入れ、市内のグループホーム合同での会議開催の検討等、市との連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、スタッフ会、日常のケアの中でも常に話し合い、絶対に行なわないようにしている。日中は玄関を開放しており、どなたでも出入りできるようになっている。帰宅願望強く訴えられる方についても、可能な限り外を歩いただけの状態になっている。玄関の扉に鈴を取り付けて施錠しない取り組みを行っている。	入居者本位の生活支援に取り組めるようスタッフ会議や職員間での意見交換をおとして身体拘束に該当する行為の把握に努め、身体拘束のない支援に取り組んでいる。日中は玄関だけでなく門扉も開放しており、地域住民が気楽に来所できるよう施錠はしていない。	

グループホーム仁良川苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全スタッフが、高齢者虐待防止関連法の資料などに目を通し、勉強会をしている。また、スタッフ会や、日常的にもスタッフ間で話し合い、見過ごすことのないよう注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修などに積極的に参加して学んでいる。研修終了後にスタッフ会で勉強会をして資料等の回覧を行っている。現在は活用する方はいないが必要の方がいた場合は周知していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約、料金改定などの料金変更、解除する際は、十分な話し合いの場と、時間をも置き、説明を行い、理解、納得していただけるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常の会話を大切にし、その中から利用者の、希望や苦情などの訴えていることを聴きもらさず、必ず、スタッフ間で相談し、話し合いの場をも置き、運営に反映させている。	家族の来所時には入居者の近況を報告すると共に、意見や要望等がないか確認に努めている。家族からの希望により入居者の日帰り旅行に家族も一緒に参加する等、家族からの意見を運営に反映させている。入居者からは家族に会いたいとの要望が多いことから家族に来所を呼掛けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	半年に一回のスタッフ面談、スタッフ会、日常等に話し合いの場を設け、スタッフの意見、提案をいつでも聞き、法人院長、事務長に報告し反映させている。	職員は管理者に日々の支援の中やスタッフ会議等において、気付いた点等の提案や意見が伝えられるようになっている。職員からは入居者の状態による支援方法、入浴や室温管理等についての提案が出され、職員間での意見交換や検討を行いながら改善に役立っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	能力向上の為に研修等に出来る限りでの参加を推奨している。処遇改善給付金は責務及び能力に応じて分配している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修には時間の許す限り参加し、職員が参加したい研修には積極的に参加できる機会をもうけている。参加した研修内容についてはスタッフ会で全員に周知している。又、2ヶ月に1度職員での勉強会を行っている。		

グループホーム仁良川苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	下野市内のグループホーム職員との交流をはかり、問題があった場合などはお互いに連絡相談している。地域運営会議にて、地域の同業者と集まれる機会をもうけていく話がでている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	必ず利用される本人に見学に訪問していただき、その後、ご家族と共に本人の希望、不安なこと、求めていることを聞く場を設け、ゆっくり話す機会を作っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用される本人とは別に、事前に見学に訪問していただき、その後、ご家族に不安、求めていることを聞く機会を設け、ゆっくりと話す機会を作っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時にゆっくりと話す機会を設け、その時必要としている支援を聞き出す努力をしている。又、必要に応じては、福祉サービスや医療サービスなどの紹介を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	センター方式を活かし、入居者の方が培ってきた経験を活かしていただきながら、日々の生活を共にすることで職員も学ばせていただき感謝の気持ちをあらわし、共に暮らすことでお互いを支えあう関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ホームでの行事の際は、必ず家族の方を誘い、入居者、家族、職員が共に分かち合えるような関係作りをしている。又、面会に来られた際は今日あった出来事などを報告させていただき、家族からも気になること等あった場合は気軽に話していただける関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が大切にしてきた馴染みの人、場所などは、外出時などに立ち寄りなど途切れないようになっている。遠い場所などは年間行事に組み込み支援を行なっている。	入居前に住んでいた近隣の方が面会に来てくれており、居室で入居者と一緒に寛いだ雰囲気の中で食事等ができるよう配慮している。職員と買い物等に出掛けた際には馴染みだった食堂等に寄ることもある他、家族の協力も得ながら馴染みの場所や人との関係の継続を支援している。	

グループホーム仁良川苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	孤立しがちな入居者の方や、難聴の方には、職員が仲介に入ったり、皆で楽しめる空間作りなどで関わり、支えあえるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	苑行事などで退所後に手伝いなどで来てくださったたり、遊びに来てくださる家族もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	その方の想いを取り入れながら、日常の会話、センター方式、家族の意見等を聞き、そのひとらしく暮らせるように支援している。	「今日は天気が良いから外出したいね」等という入居者との会話から意向を把握するようにしている他、職員は入居者との馴染みの関係から言葉やしぐさ等からも本人の意向をくみとっており、本人本位の支援に取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日常の会話、家族からの情報、センター方式を活用し、把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の状態、様子、会話から現状の把握をし、変化があれば、その都度記録に残し、必要であればその都度連絡している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	センター方式を元に、入居者、家族の想いや、その人らしく生活していく為の課題を話し合い、把握し、スタッフ間でも話し合いをしながら介護計画を作成している。見直しにはモニタリングを行い、変化があった場合はセンター方式を再検討し、家族、スタッフ会等で話し合い追加、削除など検討し現状に即した新たな介護計画の作成に努めている。	入居前の家庭訪問や入居前に利用していた事業所とも連絡を取り、生活状況や支援状況の把握に努め、本人や家族の希望を確認したうえで介護計画を作成している。毎月のモニタリングと3か月毎の見直しにより、状態に即した介護計画の見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	1日の様子を必ず個別に記録に残すようにしてをり、職員間で情報を共有しながら、日々の様子を元に介護計画や実践の見直しに活かしている。		

グループホーム仁良川苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームだけでは支援できないニーズについては他のサービスなどを活用しながら本人、家族のニーズに対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本人の意向、必要性に応じてボランティア、民生委員、教育機関等と協力し支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者本人、家族等が希望している医療機関への受診は対応している。必ず事前に連絡を取り、状態、様子、認知症であること等伝え、理解、配慮していただき適切な医療を受けられるよう支援している。	同法人でもあるホームの協力医をかかりつけ医としているが、診療科目が無い場合には、希望する他の医療機関での受診を支援している。協力医からは2か月毎の定期検診が行われ、救急の場合も速やかに対応できる体制が取られている。訪問時にはインフルエンザの予防接種が実施されていた。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	経営母体医療法人であるため、医院の看護師に相談、助言を求めたりして、入居者1人ひとりを理解していただいている。また隣接しているデイサービスの看護師が急変時にはすぐに駆けつける体制を整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際は、家族と話し合い、病院関係者とも話し合いの場を設け、早期退院にむけての支援をしている。又、定期的に面会に行き、その都度、病院関係者と話し合いの場を持つようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化、終末期へのケアについては、早い段階からホーム職員、法人院長、事務長等と話し合いの場を設け、家族の方の希望、願いを聴き、家族の方とも話し合いの場を設け、全員の方針を共有できるよう勤めている。院長と共にチームとしての支援の準備も出来ている。	入居者が重度化した場合には、本人が安全で無理なく生活できることが重要であることから、ホームでの対応の限界を見極めながら、家族とも相談したうえで入院や他機関へ移ってもらっている。終末期に関するマニュアル等は作成していないが、その都度、協力医や職員間で話し合っ対応を決めている。	今後、入居者の高齢化や重度化に伴い、住み慣れた当ホームを終の住処にとの希望が増えてくる事も考えられるため、重度化や終末期に向けたホームとして方針や対応マニュアルの作成について、協力医や職員との協議を重ね検討していくことに期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変、事故発生時の緊急マニュアル、勉強会、消防署救急隊による救急演習を実施している。		

グループホーム仁良川苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域運営会議で自治会に協力を求め、災害時などでの協力体制が取れている。防火管理マニュアルを作成し、防火訓練を行う際は近隣住民に声をかけ参加を呼びかけている。	年2回、消防訓練を実施しており、内1回は夜間時を想定した訓練も実施している。災害時対応の連絡網には自治会長にも入ってもらっている他、近隣住民が非常時には駆け付けてくれる態勢ができています。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー確保は、職員全員で徹底しており、入居者に対し尊敬の気持ちを持ち対応することを心掛けている。又、記録等個人情報取り扱いも徹底しており、外部評価等で開示するような場合は、家族、本人に必ず許可を取っている。	入居者の尊厳やプライバシーの確保を職員へ呼掛けており、個人情報の管理の徹底や入居者への声かけ、誘導の言葉かけではプライドを傷つけないよう努めている。入居者への呼びかけは原則名前に「さん」付けとしているが、家族からの要望で「お父さん」「お母さん」と呼ぶ入居者もいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人が、思いや希望を話せる環境づくりやサインを見流さないようにしている。本人に合わせた説明などは、いつでも、ゆっくり話の出来る環境を作ることで行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	暮らしの主人公である入居者の日々の様子、会話の中でその日の過ごし方、一人ひとりに合ったペースを考え支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	おしゃれや、身だしなみは、職員が入居者と一緒に洋服を選び、理美容については、自分の馴染みの理容院への支援、化粧も希望者には、毎日行っている。本人、家族からの希望、要望も可能な限り答えられるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常の会話、家族からの情報などで、好き嫌い等を聞き出し、一人ひとりの好みを献立に取り入れている。準備や片付けなどは出来ることと出来ないことを見出し、出来ることは職員と一緒にしている。	献立は入居者の希望も確認しながら職員が作成し、食材は入居者と共に買出しに出かけている。入居者も職員と共に調理や配膳、後片付け等を行っており、食事は職員も一緒に会話を楽しみながら食べている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士に指示した内容で、栄養のバランスを考えた献立を作成している。摂取量が少ない場合は、記録に残し、本人の好きな物を、軽食として提供している。水分については、こまめな摂取を促しており、足りない分は、その都度、好きな物を提供している。一日の状態などで、きになる場合は必ず記録に記入し、スタッフ間での状態把握を行っている。		

グループホーム仁良川苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行い、一人で出来ない方については、職員が一部介助等行い対応している。又、定期的に歯科往診も来ていただき、口腔ケアをお願いしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握できるよう、記録を残し、トイレでの排泄を全員の方に促している。	入居者一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレでの自立した排泄支援に取り組んでいる。入居者の生活リズムを重視し、深夜や早朝のトイレ誘導は無理には行わない等、工夫しながら対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘気味の方は、排便チェック表を付けており、飲食物等を工夫し、マッサージ、体を動かせる環境づくりを行ない対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	午後から入浴をしていただいている。一番風呂、夜間入浴と希望に沿って、回数、時間等は提供でき、本人の希望を優先している。	入居前の生活パターンや入居者の希望を考慮しながら、昼食後から午後7時半頃までを入浴時間としている。重度化に伴い入浴が困難になってきた入居者には今の機能が保てるようにリハビリも行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	家にいられた際の過ごし方等を、家族から情報をいただき、センター方式を活用しながら、その人が安心して、過ごしていただける室温、空間作り、家で使っていた寝具などを使い、状況に合わせて支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師の指示通り薬を服用し、症状の変化を記録に残している。副作用等については、薬剤師からの説明があり、その都度、職員間・家族で話し合いをし理解に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族の情報、センター方式を元に、経験を活かしていける役割作り、一人ひとりの楽しみ、気晴らし等を、可能な限り支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人の希望にそって、お弁当を持って公園等に出掛けたり、散歩、ドライブ等少しでも外へ出られるよう支援している。ない場合でも、食材等の買い物など、日常的に出掛けて、外出支援を行っている。	入居者全員で市内の菊祭りや菓子工場の見学等に出かけており、来月にも、「道の駅」に行く予定である。普段は、回覧板を届けながら近所への散歩や食材の買出しに出かけ、帰りに外食をしてくる等の外出支援に取り組んでいる。	

グループホーム仁良川苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	苑内における管理は職員が行っているが、買い物等に行き、支払う際は、入居者本人に行っている。又、本人の希望によりいつでも、使えるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人、家族の希望があれば、日常的に電話を使用できるようにしている。又、年賀状、暑中見舞い等は必ず作成しており、本人の希望に応じていつでも手紙のやり取りが出来るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家にある様な気持ちになれるような家具や、カーテンにし、季節、天候によって照明は調節し、落ち着いた雰囲気を作っている。又、テレビをつけたままにせず、生活音を大切に、話し声、笑い声の聞こえる空間作りをしている。	共用空間には入居者が作成した押し絵等が飾られ、リビングでは入居者が歌を唄ったり、リハビリ体操が行われている。デッキがある中庭ではお茶を飲んだり、草花の世話をしながら思い思いに過ごしている。共用空間には床暖房が敷設され、穏やかな暖かさが維持されており、テレビの音量等も適切に管理されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間が、洋室と和室の二箇所に分かれており、ダイニング、テレビ前の空間、中庭など状況に応じて自由に使えるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベット以外は、本人、家族に相談し、昔から使っているもの、馴染みのものを持参していただいている。その他にも、写真、花、作品などを飾り、居心地の良い空間作りをしている。	入居前の生活と違和感がないよう、本人が使い慣れた馴染みの物の持参を促しており、筆筒や仏壇、テレビや家族の写真等が持込まれている。入居者が混乱無く、安心して暮らせるよう家族からの協力も得ながら居室づくりに取り組んでいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	家族からの情報、センター方式、日常の会話、記録を活用し、混乱や、失敗を防ぐよう支援し、分かる力を活かし、出来る限り安全で自立した生活を送っていただけるようにしている。		